

「女性文化人」の系譜 1

—『現代出版文化人総覧』にみる戦後初期の女性文化人—

頌栄短期大学 高山育子

1 目的

「文化人」とは何だろうか。「文化人」は自称するような肩書ではない。また、誰が「文化人」で誰が「文化人」でないかについて明確な境界線があるものでもない。「文化人」という言葉そのものがさまざまなニュアンスを持っており、「知識人」や「インテリ」、「教養人」と同義に用いられたり、「有名人」という意味で用いられたりもする。言葉の定義としては、「知的教養のある人。多く社会的活動にかかわる学者・芸術家など」とされる（『広辞苑 第6版』）が、「教養」が指すものが変化したり、情報メディアや高等教育の普及状況によっても変わってきたであろう。本報告は、量的アプローチにより「女性文化人」どのような属性や経歴を持つ女性で、どのような分野で活躍したかについて明らかにすることで、「女性文化人」のイメージや範囲を描き出そうとする試みである。

2 方法

本報告でデータとして用いるのは『現代出版文化人総覧（昭和23年版）』である。いわゆる人名事典は数多いが、書名に「文化人」という言葉を用いた人名事典はそれほど多くない。同書は、「出版文化人」（「出版文化の各方面に活動された執筆家」）の氏名と経歴や出身地、出身校などの属性が記載された人名事典である。人名事典のなかで、「文化人」というカテゴリで人物が収集されていて、かつ属性が得られる事典としては唯一のものとしてよいだろう。属性項目をデータ化し、単純集計するほか、男性との比較を行なう。

3 結果

同書には、「哲学・宗教・教育」、「歴史・地理」などの20の部門別にのべ4,778名が記載されている。各人物について、現住所、出生年月、出身地、出身校、執筆専攻項目、閲歴、関係団体、最近の著書・雑誌論文・作品をデータ化し、分析をおこなった。

掲載されている女性はのべ144名（3.0%）である。女性比が高い部門は、「短歌」（12.7%）、「小説・随筆・戯曲」（10.0%）、「厚生」（8.3%）、「俳句」（4.7%）、「児童」（4.3%）である。短歌や俳句、小説、戯曲など文芸領域と、「厚生」、すなわち服飾、栄養、子ども関係といった家事、家庭に関わる領域に多い。一方、「経済」、「農学」、「工学」、「言語学」の4部門に女性は1人もいない。また、「理学」、「外国語・外国文学」など、いわゆるアカデミズムの領域に女性は少ない。

男性を執筆部門比に応じてランダムに144名を抽出し、女性との比較をおこなった。この結果、平均年齢は男女ほぼ同じで、現住地（東京／東京以外）では、女性に東京在住者が多い（ $\alpha=0.10$ ）。男女とも留学経験のある人物は少数であり、男女差はない。博士学位保有者については、女性5名（3.7%）、男性28名（11.8%）と男性に多い（ $\alpha=0.01$ ）。

4 結論

昭和23年当時、論文や著作のある人物＝文化人とすると、女性は「物書き」、男性は「学者」というイメージであることが浮かび上がった。

今後は、資料の類似点、相違点に留意しつつ『評論家人名辞典』を用いて同様の分析を行ない、1970年代から2000年代にかけて、時代の変化とともに女性文化人イメージがどのように変化してきたかを追う予定である。

（詳細な結果および文献は報告当日提示する）